大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」（上）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004643

ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」（上）

塚田秀雄

はじめに

中世の北欧に関する地理学、民族学的資料として、ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」は多くの分野の研究でしきりに引用される貴重な文献である。アダムの原著は「ハンブルグ教会大司教列伝」：Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum 4巻であるが、「北欧諸島誌」はその第4巻、Descriptio Insularum Aquilonis を指す。一、二巻はハンブルグ教会に属する司教管区の歴史、三巻はアダムにこの著作の執筆を命じた大司教アーダルベルトの伝記であるが、一一世紀の北欧を総合的に記載している第四巻が歴史地理的情報として際立った重要性を持つ。

近年、複数の現代語訳が出て、漸くこれを読む機会を得た。スウェーデン語版は全巻と原注の全訳に併せて、アダムに関する四編の論文を収録している。デンマーク語版は第四巻のみのデンマーク・ラテン語の対訳である。ここでは両現代語訳を対照しながら第四巻について紹介するが、地名の表記等必要に応じてラテン語原文も参照した。

ブレーメンのアダムについては、もともと南または中部ドイツに住んでいたフランク人で、一〇六六年または一〇六七年にブレーメンに来住して大教会の修道会員ならびに教会学校の教師となったこと以外は不明の部分が多い。

底本としたのはスウェーデン語訳[1]であるが、デンマーク語・ラテン語対訳[2]も必要に応じて参照した。

Ⅳ巻の一〇―二〇章は一旦完成した原稿に、後から挿入したという説もある。記載内容については、これまでの研究成果も併せて別稿で検討することとし、ここでは論じない。

元本は失われているが、多くの写本があり、原注のあるものとないものなどの異本も多い。原注としたのは欄外書き込みであり、書誌学的な検討では、著者本人によるものと著者以外によるものとがあるとされる。この訳文では、sk—として各章の末尾にこれを付した。

序

A　ハンブルグ教会が託された異教徒に対する伝道という使命について、全ての前任者が努力を傾けられたことを、偉大な大司教アーダルベルトはよくご承知であり、遠隔の地に住む人々に対し大司教区の影響を強めようとご自身も誰にもまして努められた。大司教は、まだ改宗しない民族の救済とすでに改宗した者の信仰をゆるぎないものにするために、ご自身がこの伝道活動に参加することを真剣に考えられた。神を賛美する日頃の説教の中でも、自分の計画を熱心に話されるのが常であり、聖アンスガルが最初の伝道者であり、リムベルト、ウンニに続いて、大司教自身が第四の伝道者となることを求められている。何故なら、その他の先任の大司教は極めて重要な情報について、自分の労を費やして責任を果たしたのではなく、副司教の助けによってこれをなしたに過ぎないからだと言われた。その旅行を決意された時には、全北欧すなわち、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーを訪ねた後は、オークニー諸島と世界でもっとも遠い土地アイスランドにも達せられるべく計画されたのである。これらの土地は大司教の時代にその努力によってキリスト教に改宗したのである。大司教が計画を明らかにしたこの歴訪は、極めて賢明なデンマーク王の助言によって断念された。デンマーク王は大司教に対し、蛮人たちは、かれらの土着の習慣になじまない未知の人々によるよりも、彼らの言葉を話し彼らと似た生活をしている人物によって、よりたやすく改宗せしめられると言ったのである。大司教が神の言葉を異教徒に説くに足ると認める人物の善意と信仰を、寛容と愛をもって信ずるだけでよかったのである。我が大司教は信頼すべき王の意見を受入れ、さらに大いなる善意によって、異教徒の間で働く司教や東方の諸国の王たちからの使節に対し、全ての人に示した寛容をもって接せられた。大司教は非常な愛をもってこれらの人々を受け入れ、食料を与え、帰路につかせたので、彼らは全て自分の意思で、法王よりもまずアーダルベルトを多くの民衆の父のごとく慕い、多くの贈り物を持参し代わりに彼の祝福を得た。

B　アーダルベルトは伝道の任務については、時の状況と人々の習慣が求めるところに従ってこれをなした。彼はあらゆる人々に対し、非常に近づき易い存在であり、寛容で親切であったので、彼の

偉大さによって小さなブレーメンがまるでローマのごとき評判を得、世界中のあらゆる人々がこの地を目指すようになった。なかでももっとも遠い土地から来たのは、アイスランド人、グリーンランド人であり、イェートやオークニーからの使節であった。彼らは布教使節を自分たちの土地に送るように懇請したので、アーダルベルトは直ちにこれに応え、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーと大洋中の島々のために多くの司教を任命した。これらの司教に思いをはせてアーダルベルトは「稔りは豊かだのに刈り手は少ない。収穫の神がそのためにもっと多くの刈り手を送られるように念ぜよ」と語った。

C　大司教はこれらの人々が多かったことに励まされて、デンマークで初めて副司教のための宗教会議を開催することを決定した。時期が適当であり、植え付けた若木に多大の修正が必要であったからである。例えば、司教達は祝福の見返りに支払いを受け、民衆は十分の一税の支払いを拒み、誰もが信じ難いほどの暴食と姦淫にふけっている。これら全てを考慮して、アーダルベルトはローマ法王の権威に支えられかつデンマーク国王の実際的な援助を期待して、全北欧の司教が参加するこれまでにない大きな教会会議を開催しようとした。海の彼方からの参加者だけがやや遅れて、宗教会議がこの日まで延期された。法王が会議に反対するデンマークの司教たちにあてた書簡と大司教自身が他の者にあてた書簡にこの証拠がある。私はこれらの書簡をそのままここに供する必要があると考える。

D　「神の奉仕者たる司教アレクサンデルが、デンマーク国内に任命され、使徒の座と我が代理人に従うすべての司教に対し、挨拶と使徒の祝福を送る。尊敬すべきわが代理人であるハンブルグ大司教のアーダルベルトは、書簡並びに使節を通じて、多くの失策に責任のあるファッリア司教アイルベルト某が教会会議への召喚を三年間無視していることを告発している。これは汝らの内の何人かの教唆によるものと言われているから、我々は使徒の権威によって、汝らがこの勧めを退け、我らが兄弟の召喚に従うべく、アイルベルトを説得することを命ずる。アイルベルトは所定の査問の後、教会法による判決を受けるものである。」法王は続けて、彼らが法王に服従し、それを示すことを命じられた。

アーダルベルトの書簡は以下の通りである。

E　「聖なるローマならびに使徒の座の代表にして、全北欧の民の大司教、ハンブルグの教会の力強き指導者であるアーダルベルトがロスキレの司教ウイルヘルムに挨拶を送る。余がシュレスヴィヒにて開くことに決した宗教会議に汝自身が来るか汝の使節を送るという報告を喜びをもって受けた。この件については、しかしながら、別

の機会に語ることとする。それとは別に余は、証人として汝を臨席せしめ、余がシグチューナ教会の司教に任命したアーダルバルト司教が余にどのような迷惑を及ぼしているか、兄弟たる汝が承知していることを欲する。蛮人たちが彼を指導者とすることを欲しなかった際、彼はスカーラ教会をあえて専有した。それ故余は汝に、旅の途上にある我が使節をダールビーの司教に転送されんことを願う。」宗教会議については語るべきことも多いが、その他にも読者を飽きさせぬために書かずにおくことも多くある。

F　大司教が異教徒のための伝道使節として任命した人数は随分多い。それらの司教座と名を、私は大司教自身のお話によって知った。デンマークには、都合十人、すなわちシュレスヴィヒのラトルフ、リーベのオットー、オーヒュースのクリスチャン、ヴィーボーのヘリベルト、ヴェンデル島の僧マグヌスとアルブリヒト、ファッリア島とフューン島の僧エイルベルト、シェラン島のウィルヘルム、スコーネ（provincia）のエギーノである。アーダルベルトはスウェーデンには六人を任命した。すなわち、アーダルバルトとアキリン、ならびにアーダルバルトとタディコ更に加えてシメオンと僧ヨハネスである。ノルウェーには二人を任命したにすぎない。トルフとシグバルトである。他の地方に任命された者であっても、満足できる者たちならばアーダルベルトは慈悲をもって身近にいさせた。赴任する時には、彼らは喜んでアーダルベルトの命令に従ったのである。マインハルト、オスムント、ベルンハルト、アスゴット、その他多くの場合がそうであった。以上に加えて、アーダルベルトはトールルフをオークニー諸島の司教として任命した。スコットランドで任命されたヨハンネスさらには自分と同名のアーダルベルトという者をもその地に送った。アイスランドの島へは、アーダルベルトはイスレイフを送った。彼が任命した司教は全部で二十人に達するが、その内三人は自分のことのみ考えて、イエスのことを考えず、信頼を裏切りぶどうの園以外では働かなくなった。高名の大司教は彼らに正しい栄誉について諭し、慈悲と賞賛を得るべく、蛮人の間にあって神の言葉を説くように論じた。私はまた大司教がしばしば七人また五人の司教に取り巻かれているのを眼にしたし、彼自身が多くの部下がいなければやってゆけないと言うのを聞いた。そして、アーダルベルトは彼らを送り出した時は孤独のためにいつもより憂鬱げであった。しかし、彼はいつでも少なくとも三人は自分の周辺にいさせようとした。多くの場合、賢人にして前大司教時代には彼の友人でもあったブランデンブルクのタングワルト、神を恐れ後にスラブの土地に派遣されゴッツカルクと共にそこで死んだ忠実な人物であるスコットランドの司教ヨハンネスならびにボボと呼ばれた者である。私は彼がどこから来たのかどこに任命されたのか

知らないが、彼は喜びの巡礼のために三度にわたってイェルサレムを訪ねたことで知られていた。イェルサレムから彼はサラセン人によって、バビロニアに送られ、最後に釈放された後世界中の多くの国を旅行してきたのである。これら三人は自分の司教座を持たなかったから彼らがアーダルベルトの副司教であったわけではないが、私は彼がこれらの者に特に好意を示したのを聞いている。

sk 94　大アーダルバルトはシグチューナとウプサラへ、シメオンはスクリードフィンナナへ、ヨハンネスはバルト海の諸島へ派遣された。

G　法王からの使節には、彼は同様に熱心に会見した。これらの使節に好意をもたれ、しばしばその訪問を受けることは友好の最上の形であると彼は考えており、彼はただ二人の主を持つことで知られていた。すなわち、法王と王である。全ての世俗的宗教的権威はこれらの至高の存在に従うのである。アーダルベルトは明らかにこれらを畏敬していた。このことは、アーダルベルトがこれら二者に示した完全な真実によって表されている。彼は法王の権威以上に重要なものを何ら認めなかったし、その往古からの至高の存在は侵すべからざるものでありその使節は特別の愛をもって受け入られるべきであると主張したのである。彼が皇帝の権威をどれほど尊んだかはとりわけ、王に対する忠誠の故に王子の側の脅迫または追従のいずれがあっても王と争わなかったために憔悴してしまう程であったと彼の副監督が証明している。王の権力は快く思わない者たちには、恐るべきものであるから、王国内でしばしば陰謀が企てられたが、アーダルベルトはそのような陰謀には例え一言たりとも加担することはなかった。忠誠に対する感謝として、王は彼に宮廷での重要な地位を与え、その寄進によって王はブレーメン教会に多くの財をもたらしたのであり、これについては私は既に詳しく述べたところである。例えしばしば王たちの意に反することであっても、全北欧の何処であれふさわしい場所に、アーダルベルト自身が司教区を設立し、彼が牧師の中から選んだ者を司教に任命する決定権を全て、法王がアーダルベルトとその後継者に委ねるという特別の名誉ある地位をアーダルベルトは法王によって得たのである。ここまで私は彼らの任命と司教座について述べることなしにきたので、これに関連して、デンマークの位置やデンマークより更に遠方に位置する国々の自然を叙述するのが適切であると考えられる。

一　章

デンマーク人の土地は聖アンスガル伝に書かれているとおり殆ど全て島に分かれている。エイダー川が我が国民北アルビング人とデンマークを隔てている。この川は、異教徒が住んでいてイサルン

ホーと呼ばれ、野蛮人の海にそってシュリー湖まで続くと言われる森林地帯に深く入り込んでいる。一方でエイダー川はローマ人がブリタンニア海と呼ぶフリーズ海に注ぐ。デンマークの最初の部分はユランと呼ばれるが、エイダーから真っすぐ北に延びている。もしフューン島に道をとれば、旅程三日である。しかしもしシュレスヴィヒから直行すればオールボーまで五〜七日を要する。これはオットー大帝が進軍した道で、さらに進めばヴェンデルに面する海に達し、この海は今もその勝利に因んでオットーの海峡と呼ばれている。ユラン半島はエイダーでもっとも幅広いが、舌の形のようにヴェンデルと呼ばれる先端にむけて次第に細くなる。この岬がユラン半島の終わりである。ノルウェーへはここから最も短い航海となる。半島の土地は痩薄で、川沿いの地方を除いては、殆ど全地方が不毛の印象を与える。塩気の多い土地で死の孤独があるのみである。全ドイツはその深い森の故に恵まれているとはいえないが、ユラン半島は他の土地よりももっと恐ろしい土地である。陸路は食料の不足のために、海路は海賊の襲撃のために恐れられる。どこにも殆どいかなる耕地も見出せず、人間の居住に適した地方は殆どない。しかし入江には大きな集落がある。オットー大帝はかってこの土地に課税し、三つの司教区に区分した。その一つを彼はシュレスヴィヒ、別名ヘデビーに置いた。この土地は住民がシュリーと呼ぶバルト海の入江にある。集落の名もそこから付けられた。この港から船はスラヴの土地、スウェーデン、バルト海、さらにはギリシャ正教を信ずる土地へと向かう。他の司教区をリーベにつくった。海から通ずる別の水路に面した集落で、そこからはフリースランドやイングランドさらには我がザクセンへと航海する。オットーは第三の司教区をオーヒュースに置いた。この町は極く狭い水路でフューンと隔てられており、この水路はフューンとユランの間の長い入江が北端のオーフュースまで通ずるものである。ここから、フューン、シェラン、スコーネ、ノルウェーなどに航海できる。

sk 96　イサルンホーの森林地帯はシュリーというデンマークの湖から始まり、リュベックというスラヴ人の町とトラーヴェ河口に達する。

sk 99　リーベからフランドルのシンクファルへは二昼夜で航海できる。シンクファルからイングランドのプロールへは一昼夜半で達する。これはイングランド南端の岬でリーベからここへの航海は湾を南西に進む。プロールからブルターニュのサンマシューへは一日である。ここからサンチァゴ近くのヴァレへは三昼夜である。そこからリスボンへは二昼夜で、これら全航程は螺旋状に南西にむかう。リスボンからニェルヴァ海峡へは三昼夜、そこから南東に転じて、タッラゴーナへは四昼夜、そこで北東に転ずる。タッラゴーナ

からバルセロナは同じく北東へ一日である。バルセロナからマルセイユはわずかに南によるがほとんど真東に一昼夜である。マルセイユからメッシーナは南東に転じて四昼夜である。メッシーナからアッコンは十四昼夜でコースはほとんど真東である。

sk 102　オールヒュースとヴェンデルのちょうど中間にヴィボーの町がある。

二　章

しかし上記の内、第三の司教区が廃止されて後は、ユランにはシュレスヴィヒとリーベの二つの司教区が残るのみとなった。またリーベの司教であったウァルスが死んだ後は、この地は大司教の優れた考えで四つの司教区に区分され、リーベにオットー、オーフェースにクリスチァン、ヴィボーにヘリベルト、ヴェンデルにマグヌスを任命された。最後のマグヌスが任命されての帰路に難船のために死んだので、アルブリッヒがこれに代わった。これら四人の司教はスヴェン王の定めたことによりリーベ司教区を四分した。

sk 104　三分されたヴェンデル島は大洋への出口にある。

三　章

大司教は自分の下の聖職者からシュレスヴィヒにラトルフを、シェランドにウィルヘルムを、フューンにエイルベルトを任命した。エイルベルトは改宗したヴァイキングであったと言われる。彼はエルベ河口のはるかかなたにあるファッリア島を最初に発見した者であり、そこに修道院を建てて人が住めるようにした。この島はハーデルン島の正面に位置し、長さ八マイル弱、幅四マイルである。住民は燃料として麦藁と難破船の木を利用する。海賊は例え僅かでもこの土地から何かを奪い去るとその度に、すぐに難船のために死ぬか何者かに殺されるかして、無事に帰還する者は無かったと言われる。そのため海賊達は、彼らの掠奪品の十分の一をそこに住む陰者に供するのに熱心であった。この島は鳥と家畜が豊富である。小山はあるが木は無い。極めて急峻な崖に囲まれており、上陸できる場所は一か所のみでそこは水場でもある。この場所は全ての船乗り達、とりわけ海賊達の迷信の対象である。そのためこの島はヘルゲランドと名付けられた。聖ウィリブロールド伝で、この島がフォセティスランドと呼ばれ、デンマークとフリースランドの境界にあることが知られる。フリースランドとデンマークの沖合には、別の島々があるが、特に述べるに値しない。

四　章

フューン島はヴェンデルの隣にあるかなり大きい島であり、蛮人の海への大きい海峡に面している。この島はユランと呼ばれる州の

近くにあり、ユランからは極く簡単に到達することができる。そこには大きな町、オーデンセがあり、これを取り巻く島々は小さくても全て肥沃である。もしユランからフューンに旅するならば、真北に向かう事を思い出すであろう。しかしもし、フューンをぬけてシェランに行くならば、東に向きを変えることになる。シェランへ行くには二つの可能性があり、一つはフューンから、他はオーフュースからである。距離は両者変わらない。海は当然ながら嵐が多く、二重の危険がある。追い風を受けている場合でも、海賊の手に落ちないようにしなければならない。

五　章

非常に大きいシェラン島はバルト海の入江に位置している。この島はその住民の勇敢さと肥沃なことで有名である。長さは二日の旅程、幅も同様である。この島の極めて大きい町は、デンマーク人の王の居城のあるロスキレである。この島はフューン島からもスコーネからも等距離にあり、ここへの航海は一昼夜を要する。この島の西にはユランやオーフュース、オールボーの町やヴェンデルがある。北方にはなにも無くて、ノルウェー海があるばかりである。これに対し、南方では、既述のフューンとスラブ海の入江がある。東では、この島はスコーネの突出した部分に面する。そこにはルントの町がある。

sk 108　シェランとフューン両島の間にスプルーグェーという小島がある。ここに海賊の洞窟があって全ての航海者にとって脅威となっている。

六　章

海賊行で集められた多くの金がある。住民がヴァイキングと呼び、我が国民がアスコマンネルと呼ぶ海賊達は、デンマークの王に税を支払い、この海を巡って数多く住んでいる蛮人から獲物を得る許可を得る。そのために、彼らが敵に対して持つ自由を自分達と同じ国民に対し濫用することもあり得る。彼らは互いに不信を抱き、彼らの一人が他を捕らえれば直ちに、情け容赦無くその友や見知らぬ者に売り飛ばしてしまう。デンマーク人は法律や習慣が他の者とは全く異なっており、正しいことに逆らって戦う。私がこれらの点で唯一触れておくべきと考えるのは、彼らは、女が不貞を働けば女を売ることである。もし男達が王の権威を冒瀆したり他の何かの不法行為で捕らえられると、彼らは鞭で打たれるよりも、斬首されることを選ぶ。死刑か奴隷とする以外の罰は無く、彼らは判決を受ける時には、喜びを示すことをもって名誉とする。涙、不平その他の心の悔いの表明を、我々は健全なことと考えるが、デンマーク人

はこれを嫌い、誰も自分にとって嫌なことや身近な者の死を悲しむことはならない。

sk 110　広場には誰の眼にもつくように斧が懸けられていて、罪人に死の恐怖を与える。死刑が執行される場合は、判決を受けた者が祝いの席に赴くように喜びの声をあげながら、刑を受けるのが見られる。

七　章

シェラン島からスコーネへは多くの航路があり、最短は目に見えるヘルシングボルイヘである。スコーネはデンマークでもっとも美しい地方であり、これはその名前が示す通りである。人口が多く、肥沃で商品も豊かであり、今では教会に満ちている。スコーネはシェラン島の二倍の大きさで、三百の教会があり、シェラン島はその半分、フューン島にはその三分の一の教会があるといわれる。スコーネはデンマークの最もはずれの位置にあり半島をなしている。すなわち、東方のスイオネース人の国とデンマークの境界をなす隣接の細長い土地を除けば、全て海に囲まれている。人がスコーネからイェータランドへの道を行かねばならぬ時、そこには深い森と近づき難い山があるから、波荒い航海によって危険な陸路を避けるかその逆にするかいずれが利益であるかを考えることになる。

sk 111　この島からロンゴバルド人やゴート人はその移動を開始した。この島はローマの歴史家からはスカンディア、ガンガーヴィア、スカンディナヴィア等と呼ばれる。この土地の最大の町はイングランドを征服したクヌートが、ロンドンに対抗するものにしようとしたルントである。

八　章

スコーネ地方には、他の地方から来てたまたまこの司教区の面倒をみた何人かを除いて、これまでいかなる司教も任ぜられなかった。その後、シェラン島のイェルブラント司教と彼の後はアボコが両地方の教会を運営した。しかし現在ではアボコも死に、スヴェン王がスコーネ地方を二つの司教区に分割した。一つはルントでヘンリクに割り当て、一つはダールビーでエギーノがこれにあたった。エギーノは大司教によって任ぜられ、ヘンリクはこれまでオークニーの司教であったが、クヌート王のイングランドでの徴税官であったと言われる。彼はこの資産をデンマークに持ち帰り、贅沢な生涯をおくった。彼についてはまた、前後不覚になるまで飲酒する破滅的な習慣に溺れきっていたので、最後には、自分の吐瀉物に命を取られて死んだと言われる。アボコとその他の者にも同じことが起こったと聞いた。これに対し、エギーノは非常に教養がありその

習慣は清潔で、異教徒の改宗に燃える熱意を持っていたとされる。かくして彼はまだ偶像崇拝に身をやつしていた多くの部族、なかでもブレキンガルと呼ばれた蛮人やイェータ人の近くホルム島に住む者たちをキリストのみ前に連れ来たった。蛮人達は彼の説教を聞くと涙を流し、その過ちを讖悔し、直ちにその偶像を取り壊し、自ら競って洗礼を受けたと言われる。彼らはその財宝など全てを司教の足下に投じた後、それを受領されることを願ったと言う。しかし司教はこれを拒否し、彼らに対し、この金で新しい教会を建て、彼らが必要とする物を充足し、これらの地方に数多くいた囚人を解放するよう説得した。

九　章

この気高い人物は、スウェーデンでキリスト教徒に対する厳しい追及が燃え上がった時に、牧師がまったくいなかったスカーラの教会やその他の教えに忠実な場所をしばしば訪れたといわれる。彼はキリストを信ずるに至った者に平安を与え、未だ信ぜざる者にはたゆみなく神の言葉を説いた。そこでは彼はよく知られたフレイの偶像を打ち壊しもした。このめざましく力強い行いによって、この神のしもべはデンマークの王によって、大きい名誉を得ている。その後、肥満のヘンリックが死去した時に彼はスコーネの両司教区すなわちルントとダールビーの指導権を得た。彼は直ちにルントをその座と定め、ダールビー司教区は司祭長と修道院の規律に従って生活する牧師の組織を持つべしと命じた。一二年にわたってその光輝ある職責を果たした後、ローマから帰着して間もなく、キリストと共にあるべく世を去った。フューンの司教ハンスも、大司教エギーノの死と偶然同じ年に死んだ。

sk 114　スコーネの第一の町ルントは海からダールビーと同じくらいの距離を隔てている。

一〇章

機会があれば、バルト海の特徴についていくらか語ることが適当と考えた。かつてアーダルダーグ司教の事蹟について述べた際、アインハルトの書によってこの海について言及したが、我が国民がこの海について知識を得るように、この書が短く述べていることに更に言葉を足してより完全に記述したい。「それは西の海から東にむかって延びる海である」と彼は言っている。このほとりに住む者によってこの海はバルト海と呼ばれている。何故なら長く一本の帯 bälte のように、スキチアの諸国を通ってギリシャ正教の諸国まで延びているからである。同じ海が沿岸に住む蛮人によって、蛮人の海あるいはスキチアの内海と呼ばれている。西の海はローマ人がブ

リタンニア海と呼ぶ海と考えられる。この海は極めて大きく、恐ろしく危険に満ちており、西方では、今ではイングランドと呼ばれるブリタンニアを取り巻いている。南方ではこの海はフリースラントとザクセン人の土地の我がハンブルグ大司教区に属する部分に達している。その東方では、デンマーク人がおり、バルト海の出口があり、デンマーク人の彼方にはノルウェー人が住んでいる。北方ではこの海はオークニー諸島を過ぎて果てしない広さで地球を取り巻いており、西はスコットランド人の祖国で、今はアイルランドと呼ばれるヒベルニア、北はノルトラントの高い崖、更に遠くアイスランドとグリーンランドがある。そこから氷海と呼ばれる海が始まる。

sk 116　東の海、野蛮人の海、スキチアの海、バルト海と呼ぶのはマルチアヌスその他の古代ローマ人がスキチアの湖またはマエオトの湖またはイェートの不毛の海またはスキチアの海岸と呼んだものと全て同一の海である。デンマークとノルウェーの間の西の大洋から始まるこの海は東に伸びるがその長さは知られていない。

sk 117　既に述べたこの大洋には今ではファッリアまたはヘルゲラントと呼ばれる小島がある。櫂付きの船でイングランドから三日の航海で着く。この島はフリースラントや我が国のウェーザーから極く近いので、…河口にある島からこの島が水面に頭を出しているのが認められる。……既述のファッリア島へ航海…（欠）

sk 118　フリースラントは道も無い沼沢地のために近づき難い海岸地帯であり、十七の地域から成る。その三分の一はブレーメンの司教区に属し、以下の名である。オステルガウ、リュストリンゲン、トリースメリ、ウァンゲラント、ハルリンゲアラント、ノルデン、モルセチ。これら七地域に約五〇の教会がある。フリースラントのこの部分はウァーペルガウと呼ばれる干潟ならびにウェーザー河口によってザクセンから区別され、その他のフリースラントからはエムスガウ干潟と大洋によって分けられている。

sk 119　この一七の地域の内の五つはミュンスター司教区に属し、この地方の最初の司教であった聖リュドゲルはチャールズ大帝によって所領としてこれを得た。その五地域はフグメルキ、ピヴェルガウ、エムスガウ、フェデリツガウおよびバントである。

一一章

バルト海の延長を未知としていたアインハルトの資料も今では、勇敢なデンマークの族長のガムレ・ウォルフとノルウェー王のハラルの熱心な活動によって強化された。彼らは航海の非常な困難と従者の危険をおかしてこの海の大きさを探究した後、嵐と海賊の両方に追われて壊滅状態で帰還した。しかし、デンマーク人は、この海の大きさをしばしば多くの人間によって述べられてきたとおりに確

認し、多少の追い風で一月でロシアのノヴゴロッドに到達するとした。幅についてはアインハルトは一〇〇ローママイルを超える所はどこにもなく、多くの場所でそれ以下であるとしている。この点については、この内海の始まりのところで、デンマークのオールボー岬すなわちヴェンデルとノルウェーの高い崖との間の大洋から内海への入口は非常に狭いので、船はここを一昼夜で楽に航海できることで知られる。この海がデンマークの領域を離れると、その枝湾を広く延ばすが、真正面にウィルツェナの住むイェータの土地で再び一つになる。奥に進むほどこの海は両岸が広がる。

sk 120　ロシアは東方に位置し、潅漑された園地のようにあらゆる良い物に満ちているとして、野蛮なデンマーク人によってオストロガルドと呼ばれる。この地はまた昔からフン人の住地であったからフンガルトとも呼ばれる。

一二章

アインハルトは「この沿岸には多くの異なった民族が住む。我々がノルドマンと呼ぶデンマーク人とスイオネース人が北岸と湾内の全ての島に住んでいる。南岸には、スラブ人、エストニア人、その他さまざまな部族が住んでいる。なかでも重要なのが、ウィルツェルとも呼ばれるウェルターベル人である」と言っている。デンマーク人、スイオネース人、その他デンマーク以遠に住む全ての部族はフランクの歴史家によってノルトメンと呼ばれている。これに対し、ローマの著者は彼らをヒペルボーレと呼び、中でマルチアヌス・カペラが高く評価している。

一三章

この内海の入口でその南岸から我が地方にむけて居住する第一の民族はユータルと呼ばれるデンマーク人で、シュリー湖に至るまで住んでいる。そこからハンブルク大司教区の領域が始まり、スラヴ系の沿岸住民の土地を通って、ペーネ川に達する。そこで我が大司教区は終わる。この境界からオーデル川まで、ウイルツェル族とリューティズ族が住地を有する。我々が聞く所によれば、オーデルの彼方にはポムメル人が住む。更に彼方にはポーランド人の広い土地が広がり、これはロシアと境するといわれる。これがこの海の支湾を限る最後にして最大の土地で、ウイヌーレル人が住む。

一四章

しかし逆行してバルト海の入口に来れば、その北側でまずノルトマンに出会う。次いでデンマークの地方であるスコーネが突出し、その東には、イェータ人がビルカにいたる広大な領土に住んでい

る。次には、スイオネースがおり、クヴィンノランドにいたる広い領土を支配している。その東には、ロシアに達するまでに、ウィッツェル、ミッレル、ラーメル、シューテル、チュルカルが住む。ここでまたこの海は終わる。この海の南岸はスラヴ人、北岸はスウェーデン人によって、その居住地として占拠されている。

一五章

この地方を知る者達は、スイオネースの土地から陸路をギリシャまで旅行した人間がいると主張する。しかし、通過しなければならない蛮人のことを考えれば、そのような旅行は不可能である。それ故誰でも危険であっても海路を行くのである。

一六章

この湾には多くの島があり、総じてデンマーク人とスイオネース人によって支配されるが、いくつかはスラヴ人の支配するものがある。これらの第一はこの海への人口にあるヴェンデルである。第二がモース、第三がチューであり、全て隣接している。第四はサムセーでオーフェースの町の真向かいにある。第五はフューン島で、第六がシェラン島、第七がこの隣島である。これらについてはすでに述べている。第八のホルムと呼ばれる島はスコーネとイェータランドに近く位置し、野蛮人の土地やギリシャ正教を信ずる土地へ航海する船にとって、よく知られたデンマークの港であり安全な錨地となっている。その他にフューン島の南東には、既述の通り、極めて肥沃な七つの小さな島がある。すなわち、メーン、フェメルン、ファルスター、ロラン、ランゲランドその他であるが、全て互いに近接した島である。これに対し、ロラン島は南のスラヴ族の土地にむかって延びている。以上の一五の島は全てデンマーク国に属し、キリスト教の名で飾られている。更に内側に入ると、もっと多くの島がありスイオネースの支配権のもとにある。その内最大の島はクールランドである。この島の長さは八日の旅程である。非常に残虐なこの島の住民は、その熱心な偶像崇拝によって、誰からも恐れられる。そこには多くの金と優れた馬がある。全ての家は異教の僧、占い師、魔術師で一杯で、彼らも僧と同じ衣装を着ている。世界中、特に、スペイン人とギリシャ人がここから神託をもって帰える。聖アンスガル伝でコリと呼ばれ、当時スイオネースが課税したのはこの土地であると信ずる。今では、ある商人の主導で唯一の教会が建てられ、デンマーク国王が豊富な寄進でこれを助け、可能にした。国王自身が主の喜びに満ちてこの嬉しい報せを私に伝えてくれた。

一七章

他にも多くの島がこの海にあることを教えられた。これらの一つ

は広大なエストランドであり、今述べたクールランドに大きさで劣ることはない。この島の住民もキリストの神については誰も知らない。彼らは竜や鳥を崇拝する。彼らは竜や鳥への犠牲として、生きた人間さえ捧げる。彼らはこの犠牲を全身をよく調べた上で商人から買う。もし彼らが何らかの欠陥を有したら、竜に軽んじられる。この島はクヴィンノランドに近く位置し、既述の島はスイオネース人のビルカから遠くない所にある。

一八章

スラヴ族の海岸に接して位置する島の内、とりわけ三つが注目すべきであると聞いた。その一つはフェメルンと呼ばれる。この島はワグリールナの真向かいにあるので、ロランと同じく、オルデンブルクから見える。二番目はウイルツェナの向かいにあり、ラーネナまたはルーネナ族が住んでいる。極めて残酷なスラヴ族の一つである。彼らの間で通ずる法律に、スラヴ族の共通する問題はこの部族にその意見を訊ねることなく議論され得ないとある。彼らが部族よりも熱心に崇拝する神というよりむしろ悪魔に対する信仰の故に、彼らは非常に尊重される。これら両島はどんな航海者も見逃さない残忍な海賊にあふれている。他の部族なら奴隷として売ろうとするはずの者全部の命を奪うのである。セムブランドと呼ばれる第三の島はロシアとポーランドに接なる。この島はセムベルまたはプルッツェル族が住む。難船、海賊の危険にさらされている者のところに急行して救助するという非常に人道的な部族である。彼らは金銀に価値を認めず、外国の沢山の毛皮を持っている。その匂いは我が世界に傲慢という死にいたる毒をもたらした。彼ら自身はこの品を我々の破滅のための純正の肥料と考えていると私は信じている。我々は至福を求めるのと同様に、どのような代価を払ってでも毛皮を求めるからである。彼らは、フレル付きコートと我々が呼ぶ羊毛製の衣服と交換するのに高価なテンの毛皮を供するのである。これらの人々の性格については、彼らがキリストを信じさえすれば、非常に立派であると言い得るが、彼らはキリストについて説教する者を非人間的なやりかたで追うだろう。ボヘミアの高名な司教、アーダルベルトは彼らの土地で殉教の冠を得た。我が国民は彼らとは共通する所を全く持たず、彼らは今でも我々に対し、木立ちや泉に立ち入ることを禁ずる。それらがキリスト教徒との接触によって冒瀆されると信ずるからである。彼らは役畜の肉を食用に用い、そのミルクや血を大量に飲むのでそれによって中毒すると言われる。人々は青い入れ墨をし、顔は赤く髪は長い。その上、彼らは沼沢地の彼方に住み、いかなる者も支配者として受け入れない。

sk 121　ルーネナの島はユムネの町に境界を接し、リューゲンと

呼ばれる。ルーネナは唯一、王を戴く者たちである。

sk 122　ホラチウスはその抒情詩でこれらの部族を次のように称揚している。「スキチア人はその草原で、イェート人はその寒い土地で、古い習慣に従って湿地にその移動式の家を引きながら、より良い暮らしをおくっている。徳は両親から子供への重要な遺産である。罪を犯すことは恥辱であり、死はその代償である。」ロシア人に近く住むトルコ人は今日でもこのように暮らしており、その他のスキチア族も同様である。

一九章

この海にはその他にも数多くの島がある。全て蛮人によって占められているから、航海する者はこの島々を避ける。同様に、このバルト海沿岸には女戦士が住むという者もおり、今、この土地はクヴインノランドと呼ばれる。全員が、この女戦士たちは水を飲んで妊娠すると言いはるが、別の者達は、通過する商人あるいは捕らえている囚人との性交による他、そこによくある別の特殊な仕組みで妊娠すると言う。私はこちらのほうが信憑性があると考える。生まれる時、男子は犬の頭をもった生き物になり、女子として生まれた者は非常に美しい女になる。彼女らは共同で生活し、男との性交を軽蔑する。もし男がここに来れば、彼女らはこれを追い帰す。犬頭族はその頭を胸に持っている。ロシアでは捕らえられた犬頭族を見ることもしばしばである。彼らはしゃべる時には吠える。アラーネルまたはアルバーネルと呼ばれる者もおり、ウイツェルと自称する。残忍な大食いどもで白髪の人間を食う。ソリニスがその著書でこれらについて語っている。彼らの土地は犬によって守られる。戦いに突入すれば、彼らは犬を戦闘隊形に配置する。その土地には、ヒューセルと呼ばれる青白く、緑がかった、長命の連中が住んでいる。最後にアントロポファーゲルと呼ばれる者や人肉を食べる者がいる。その他別の注目すべき生き物がおり、船乗り達は、よく見掛けるというが、わが国民からはそのようなものはほとんど信じ難いと考えられている。

sk 123　スイオネールの王エームントがその国土拡大のために、息子アーヌントをスキチアへ送った時、アーヌントは海路、クヴィンノラントに達した。女達は直ちに泉の水に毒を混ぜて、王自身とその部下の命を奪った…?…これはすでに語ったが、これを私に告げたのはアーダルバルト司教自身である。そして彼はこれらの情報が真実である事を保証した。

sk 124　彼らはその言葉でウイルツェルと呼ばれる残忍な食人種であり、詩人はゲローネルと呼んでいる。

二〇章

バルト海すなわち蛮人の海については、言うべきことが沢山ある。私の知る限りにおいては、上記のアインハルトを除けば、教養のある者でこの海について述べた者はいない。しかし私の信ずるところでは、おそらく、古代ローマ人によって別名で、スキチアまたはマエオ湖、イェートの荒れ地またはスキチアの海岸と呼ばれたのがこの海で、マルチアヌスが多くのいろいろな蛮人が住みついているといっているところである。彼は、ここには、イェート人、ダーク人、サルマート人、アラン人、ネウトル人、ゲロン人、アントロポファーゲル人、トログロデュート人が住むと言う。彼らの誤った行為に心を傷めて、わが大司教はビルカをこれらの民族の都と定めた。これはスイオネースの土地の中央にあり、スラブの町ユムネの真向かいであり、この海の全ての海岸へ同距離にある。大司教がビルカの町のために任命した最初の我が国民は、僧院長ヒルティンであった。彼自身はヨハンネスと呼ばれることを欲した。…しかし、今ではデンマークの島々についての豊富な資料がある。ここでは、デンマーク人の隣人というべきスイオネースとノルトマンに注意を向けることにしよう。

sk 126　デンマーク人のスコーネからビルカまで五日で航海できる。同様にしてビルカからロシアへは五日かかる。

sk 127　そこには聖アンスガルと聖ウンニ大司教の墓所がある。我が大司教区の聖人の心地よい安息の場所であると言いたい。

——西洋文化講座教授——

註

（1）ADAM AV BREMEN. Fjärde Boken. 1984, Stockholm.

（2）ADAM AF BREMEN. BESKRIVELSE AF ØERNE I NORDEN. 1978, Højbjerg.